



火から学ぶ

学校長 小邑 政明

毎年12月に、私立高等学校の校長会で、県外の先進的な取り組みを行っている高等学校を視察し、それぞれの学校運営に生かすという取り組みを行っています。2年前、近畿方面の高等学校を視察した帰りに比叡山の延暦寺に寄ってきました。

私は以前から「油断」という言葉の語源について私なりに考えていました。今回延暦寺を訪れることによってその考え方が間違っていないことが証明されました。延暦寺の方から、根本中堂に灯される法灯(ほうとう)は、開祖最澄の頃から消さないよう油を足し続けており、この油が断たれることが無いよう戒めたことに由来すると説明を受けたのです。従って、「油断」という言葉は日本以外の漢字文化圏では通用しない言葉です。「油断大敵」のことを、中国語では「粗心大意害死人」と書きます。英語では、Security is the greatest enemy(安心は最大の敵である)となります。

人類が最初に手にした火は、落雷や火山の噴火による自然火災によってもたらされたものだと考えられています。このようにして手に入れた火は、夜の闇を照らす「明るさ(光)」と「暖かさ(熱)」を与えてくれました。まだ自分たちで火を起こすことのできなかった人々は、夜行性の獣から身を守ってくれ、身体を温めてくれる火を大切に、これを絶やさぬように番をして守り

続けました。皆さんのなかにもキャンプファイアーで「火の長」という火の見張り役をやった人がいるかもしれません。

人類が火を手に入れた経緯については、様々な神話にもそのエピソードが語られていて、今でも出雲大社や伊勢神宮のお祭りに、木の摩擦によって発火させる儀式があります。また、オリンピックを象徴する聖火は太陽光から採ります。火は人類にとって神から与えられた一番身近でなくてはならないものです。

食べ物は火によっておいしく調理され、至福のときを演出します。物は火によって加工され道具となり新たな物を創り出します。さらに、火は物に化学変化を起こさせる力を持っています。

本校の校長室には「本当に優れた教師は、生徒の心に火を点ける」と書かれた額が掛けてあります。これは19世紀のイギリスの哲学者ウィリアム・アーサー・ワードの言葉「The great teacher inspires」の訳です。

鶯谷中学・高等学校の全職員は、この言葉を「生徒の心に化学変化を起こす」という意味にとらえ生徒と接しています。

さらに、火のように「明るく」「温かい」姿勢で、常に「油断大敵」を肝に銘じ、生徒の教育に携わっていきたいと考えています。

今回は、学ぶシリーズのまとめとして「陰陽五行説」について書きます。